公民館活動を通した高齢者の生きがいに関する研究
―山口県防府市を事例として―

Research on the Worth of Living (Ikigai)
for the Elderly through Community Center Activities
― Case study in Hofu city Yamaguchi prefecture ―

永野　ひとみ

Hitomi　Nagano

（要旨）

本格的な超高齢社会を迎えて、高齢者への社会貢献活動が国際的にも共通の政策課題となって久しい。WHO をはじめ西欧社会においては、経済社会の維持と高齢者問題の解決のため、「アクティブ・エイジング」を政策の理念に掲げ、高齢者の社会参加、社会貢献活動の推進が図られている。日本では、山口県において、全国に先駆けて「生涯現役社会づくり」事業として、高齢者への社会参加・社会貢献活動の取組がなされてきている。しかしながら、高齢者の社会貢献活動はあまり進展がみられないのが実情である。やはり、高齢者による社会貢献活動を実現するには、社会環境の整備と共に、その活動の主体である、高齢者の意識が重要なポイントとなる。つまり、社会貢献活動に参加することが、主体者の、楽しみであり、はりあいであり、「生きがい」のようなものでなければ、持続的な活動は困難であろう。

ところで、2009 年に筆者がインタビューした公民館関係の高齢者の「生きがい感」の聴き取り調において、多くの高齢者は、「生きがいは役立つこと」だと答えた。癌等の重篤な病や配偶者を亡くしたばかりの高齢者も含まれていたが、それらの高齢者の生きがい感も、他の健康な高齢者同様「生きがいは役立つこと」であった。想定外の結果であった。そこで、公民館に着目することとした。

ところが現状の公民館を取り巻く状況は、「公民館不要論」等にみられるように「公民館での学びが地域づくりへ還元されていないのではないか」と批判が寄せられ、公民館の存在自体も危惧されている。また、公民館での「趣味・教養」活動は、廃止した方がよいという議論もなされている。しかしながら、そのような公民館や公民館での「学び」の否定論は、公民館を実際に利用している人ではなく、公民館を利用していない「外側」の人の声である。

公民館は本当に「不要」なのか。本論文では、公民館を利用している「内側」の利用者

の目を通して、公民館の存在意義を考察した。アンケート・聴き取り調査の両結果から、公民館は、高齢者にとって、生きがい活動の「場」であることが確認できた。また、公民館での「学び」を通して人間関係が構築され、地域の絆づくりにつながっていることもわかった。

つまりこのことは、公民館に通って学ぶこと自体が、高齢者の心身の健康維持につながっていくことが推測される。そのような公民館活動と健康との相関関係については、現在実践的調査研究もなされているところである。そのような意味からも、今後より一層、公民館の存在は重要性が増すであろう。

本研究では、高齢者の QOL をめざして、国際的課題である社会貢献活動の促進を展望するものである。高齢者が元気でいきいき暮らすことが、ひいては、社会貢献活動に繋がることになると思われる。

そこで、社会貢献施策のアプローチの方法として「生きがい」の概念が含まれる「プロダクティブ・エイジング」のアプローチ、つまり、高齢者の「内発的な・ボトムアップ」的アプローチがより効果的だと思われる。そのことが結果的に、WHO などが目指している「アクティブ・エイジング」の実現につながるのではないだろうか。

その 1 つの実例を、山口県防府市の公民館の中で、公民館を拠点にして長年地域づくりに取り組んでいる「小野地区女性連絡協議会」の活動にみることができる。やはり高齢者にとって、地域づくりに参画し、持続的に関わり続けられる要因は、活動が「楽しい」からであり、「はりあい」や「生きがい」活動の一部として捉えられているからである。

本論文では、聴き取り調査の結果から、「公民館で活動をしている高齢者の生きがい感は役立つこと」ではないかと仮説を立て、質的調査・量的調査を実施した。その結果、山口県防府市の公民館活動者（学習・地域活動）に限定されてはいるが、高齢者の「生きがい感」の中核に「役立つこと」が存在し、また極めて「社会貢献意識」が高いことが明らかになった。

公民館での「学びが還元されていないのではないか」と批判もあったが、公民館で学んでいる高齢者は、自身の学びと共に、地域活動へ参画している実態も把握できた。そして改めて、高齢者が学びを求めている実体が浮かび上がってきた。高齢者の生きがいの内実は「学ぶこと・役立つこと・人とのつながり」であった。

公民館での様々な活動は、これらの高齢者の「生きがい」に応えるものでなければならない。それには公民館側の「学習者の行動へ変化を起こす（気づく）学習観」が重要なことが示唆された。学びの本質は、子どものみではなく、高齢者にとっても「生きる力」を培うところにあるであろう。

平均寿命が延び定年退職後の人生が 4 半世紀ある。その長い高齢期を如何に過ごすかが、高齢者にとっても社会にとっても重要な課題である。

公民館は、新たな時代の新たな課題に応え得る、可能性を持つ場所である。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 85 号	氏　名	永野ひとみ
論文題目	公民館活動を通した高齢者の生きがいに関する研究 ― 山口県防府市を事例にして―		

（論文審査概要）

永野氏の博論は、これまでの高齢者像が概して保護される客体として扱われてきたが、それはステレオタイプな見方であり、統計的にみられるように、要介護状態も１・２割に過ぎず、健康な高齢者が大半を占めているので、そこに焦点を当てて、社会貢献の主体として期待されるようになってきている高齢者像に焦点を当てるというものである。

より具体的には、インタビュー調査により、公民館に集う高齢者のほとんど全てが重病を患った人も含めて生きがいを持っているが、その生きがいとは①学ぶこと、②人とのつながり、③役に立つことに集約されることを明らかにしている。また防府市の公民館のアンケート調査を丹念に実施して比較調査を行なって、公民館に集う高齢者を含む利用者が、①学ぶこと、②人とつながること、③地域・社会に役立つことという３つの生きがいが年代を超えて共有されていることを発見した。

とりわけ公民館において、学習者全体の交流会が持たれているか、そして事務局があるか、という視覚で分析している。これは全体会や事務局がある方が、それらがなくてここバラバラにプログラムが実施されているよりも、「つながり・結びつき」が強くなり、地域づくりが活発化すると思われ、実際そのようになっていることを見出している。そして、同じアンケート調査によって、公民館を活用する高齢者は、公民館の外の地域社会において、何らかの活動に参画していることも見出している。

このように永野氏の博論の真骨頂は、山口県防府市という地域における公民館活動に焦点を当てて、聞き取り調査やアンケート調査を駆使して、丹念に実態を描きだした所にある。

前後するが、(本稿の主題とはいえないが)文献サーベイとしては以下の２点が特筆される。一つはエンジング理論であり、とりわけアクティブ・エイジング論とプロダクティブ・エイジング論の関係性において、前者が社会的貢献を要請する傾向があってトップダウン的であり、後者が自己実現・生きがいを求めるボトムアップ的なアプローチであるというユニークな結論を下している。これは先行研究では、プロダクティブ・エイジングが 1980 年代に出てきた議論であり、主に高齢者の就労参加を求めたとみなされたのに対して、アクティブ・エイジング論は就労に限らず広く社会参加を呼び掛けていると見なされているのと対照的である。そして永野氏の博論では山口県の高齢者施策において、プロダクティブ・エイジングのアプローチを推奨している。

もう一つは、いわゆる公民館不要論に対するもので、その代表的論者である松下圭一氏によれば、そもそも公民館は戦後民主主義を普及されるために社会教育として学力レベルの低い大衆に対して上から下に教えるというものだったが、市民社会の成熟によりそのようなトップダウン式の公民館は死滅するべきである、社会教育主事などのいないコミュニティセンターで構わないというものであった。それに対して、永野氏は松下氏の見解は公民館の基本的な役割である「集う・学ぶ・結ぶ」の３つのうち、歴史的制約もあり学ぶ≒学習にのみ特化したものであり、という今後の高齢化社会にとっては既にみてきたように「結ぶ」「役立つ」ということが一層重要性を帯びてくるだろうというものである。

以上のように、創造性に関して、従来の説に対して新しい論点、仮説、証明方法が付加されており、論理性においては全体として整合しており、厳格性において、基本的な先行研究が渉猟され、大まかに達成できており、論文審査結果を「合」とした。